

SHOW HEY シネマール

★★★

あさがくるまえに

2016年・フランス・ベルギー映画

配給/リアリーライクフィルムズ、コピアポア・フィルム・104分

2017(平成29)年9月23日鑑賞

シネ・リーブル梅田

Data

監督・脚本：カテル・キレヴェレ

原作：メイリス・ド・ケランガル
(ガリマール出版)

出演：タハール・ラヒム/エマニュ
エル・セニエ/アンヌ・ドル
ヴァル/ドミニク・ブラン/
ギャバン・ヴェルデ

■ショートコメント■

◆公式HPに見る本作のストーリーは次の通りだ。すなわち、

たった、いちにち――

それでも、あたらしいあさはくる

ル・アーブルからパリへ。

紡がれる、愛と喪失、そして再生の物語。

ル・アーブル。夜明け前、ガールフレンドがまだまどろみの中にいるベッドをそっと抜け出し、友人たちとサーフィンに出かけたシモン。しかし彼が再び彼女の元に戻ることはなかった。帰路、彼は交通事故に巻きこまれ、脳死と判定される。報せを受けた彼の両親は、その現実を受け止めることができない。医師はシモンが蘇生する可能性は無く、両親に移植を待つ患者のために臓器の提供を求めるのだが。その時間の猶予は限られている…。

パリ。音楽家のクレールは、自分の心臓が末期的症状であることを自覚している。彼女が生き延びるためには、心臓移植しか選択肢はない。しかし彼女は、他人から贈られた命によって、若くない自分が延命することの意味を自問自答している。そんな時、担当医からドナーが見つかったとの連絡が入る。

◆フランスの若手女性監督カテル・キレヴェレが、映画化争奪戦となった話題のベストセラー小説を映画化した本作は、そんな心臓移植をテーマとしたもの。臓器移植をテーマにした日本の映画には堤真一主演の「孤高のメス」が有名だが、本作ではメスで身体を切っ

ていくシーンや、心臓を取り出すシーンが生々しく写されるのも大きな特徴だ。もともと、それが好きな人はそれでいいのだが、それが苦手な私はいささかどうも・・・？

◆日本では、臓器移植法が1997年10月16日に施行されてから今年で20年になった。そのため、9月24日付読売新聞の「地球を読む」は、垣添忠生氏（日本対がん協会会長）の「臓器移植法20年」、「提供低迷 生かされぬ善意」、「医療体制強化へ法改正を」との見出しが躍る論文を掲載した。また9月20日付朝日新聞は「臓器提供一部施設に集中」、「移植法20年 8%の施設で半数実施」、「体制整っていない51%」という記事を掲載した。さらに、朝日新聞は9月24日付「科学の扉」で、「進化する人工心臓」と題する解説を掲載した。

それらを読む限り、日本では臓器移植法が順調に進んでいるとはいえないことがよくわかる。ちなみに垣添論文によると、2010年7月17日に改正された臓器移植法で脳死での臓器提供数は急増し、2016年には64件と改正前の約6倍となったが、心停止後の臓器提供と脳死での臓器提供を合わせた臓器提供総数は年間80～100件ほどと低迷しているようだ。しかし、フランスでの心臓移植の実態は・・・？

◆他方、産経新聞の戸津井康之記者による本作の紹介には、「フランスは日本と違い、脳死判定を受けた場合、拒否しない限り臓器提供を行うことが制度化されている」と書かれている。私はその真偽については知らないが、本作では臓器移植を待つ患者のために、24時間対応で働いているコーディネーターや医師たちの姿が克明に描かれている。

日本ではまだまだ実例の少ない臓器移植について、カテル・キレヴェレ監督は実際に手術に立ち会うなど綿密に取材を重ね、脚本を書き上げたそうだ。また同監督は「一度、鼓動を止めた心臓が別の人の命を生き長らえさせる。奇跡のように人はつながっている。この奇跡を映画で伝えたかった」と語っているが、あなたはそれを本作でどう理解・・・？

2017（平成29）年9月26日記